

『太平記』 土岐頼遠狼藉事件小考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥, 智鶴 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4637

『太平記』土岐頼遠狼藉事件小考

奥智鶴

はじめに

康永元年（一三四二）九月六日、事件は起きた。当時、権大納言であった中院通冬が後に、その時の様子を日記に記している。¹

十一月廿九日丁酉（中略）岡巷之説云、美濃国守護土岐彈正少弼頼遠今参洛云々、是去秋比令参会御幸、伏見殿御幸還幸、伏見殿御幸還幸放矢及狼籍令露見、剩去比不申暇、逃下美濃国了、仍可追討之

由有其聞、而種々武家相語之間、令帰参云々、

美濃国守護の土岐頼遠が、伏見殿からの光厳院の御幸に矢を放ったというのである。伏見殿への御幸は、光厳院が祖父故伏見院の御月忌として法華八講を修するためであった。²通冬は結願の日には姿を見せておらず、³彼が頼遠の狼藉を目にしたかどうかは定かではない。しかし北朝・足利方の有力武将である頼遠が、同じ北朝のその頂点に立つ光厳院に矢を放ったというこの出来事には、通冬も少なからず衝撃を受けたことであろう。

事件については、『太平記』卷二十三第六章「土岐参向御幸致狼

藉事」に詳しく描かれている。本話はこれまで、御幸に矢を射たという行為から、権力構造の逆転を示す事例としてのみ取り上げられてきた。また、『太平記』の「序」の思想に基づいて「頼遠らの所業を糾明している」とも論じられてきた。⁴しかし「序」に因って頼遠を批判しているというだけでは、本話の持つ魅力や面白さまでは解けないのではないだろうか。本稿では、『太平記』が描く頼遠狼藉事件の手の込んだ描写を明らかにしていくとともに、『太平記』の視点のあり方を探っていくことにする。

一 院と犬

光厳院は伏見殿で「種々ノ御追善」を行う。そこはかつて名勝の地として有名であったが、今ではすっかり荒れ果ててしまっていたという。

此故宮荒テ久ク成ヌレバ、一村薄キ野ト成テ、鶉之床モ露深ク、庭之通路絶果テ、落葉方ニ蕭々タリ、其跡ヲ問物トテハ、苔泄

ル闇之夜ノ月、松吹軒之夕風、昔ノ秋ノ哀儘、今ノ涙ヲ催セリ、物毎ニ悲ヲ添へ、愁ヲ引秋之気色ヲ、導師富留那之弁辨ヲ揚テ、光陰人ヲ不待、無常之迅速ナルニ準ラハ、數刻宣説シ給ケレバ、上皇ヲ始奉テ、旧臣老官悉ク袖ヲ絡（絞）ラヌハ無リケリ、伏見殿の荒涼たる姿を、『太平記』は歌語や漢詩・法語を駆使した美文調で静かに語り始める。その世界を一転させるが如く登場するるのが頼遠である。

頼遠は笠懸の帰りに、追善法会を終えて還御する光厳院と行き会う。召次が「狼藉也、何物ゾヤリ候へ」と咎めるが、頼遠は下馬の札をとらない。それどころか「暮目負セテクレヨ」と脅す。竹林院公重が御幸であることを告げて咎めたが、頼遠は動じることなく次なる行動に移る。

頼遠カラ〜ト笑テ、何ニ院ト云歟、犬ナラバ射テ置ト云儘
二、三十余騎有ケル院等共、院之御車ヲ真中ニ取籠、索漕回ハ
シテ追物射ニコソ射タリケレ、御牛飼轅ヲ廻テ、御車ヲ仕ラム
トスレバ、胸懸ヲ切ラレテ軛モ折タリ、供奉之雲客身ヲ以テ御
車ニ中タル矢ヲ防ガントスルニ、皆馬ヨリ射落サレテサウエ得
ズ、剩ヘ是ニモ猶飽足ラズ、御車之下簾伽リ落シ、卅輪少々踏
折テ、己ガ宿所ヘゾ帰リケル、

頼遠は光厳院を「犬」と呼んで矢を射かけ、さらに車に損害を与えたのち漸く宿所に引き上げたのだった。

御幸に出会えば当然恭順の態度を示すであろうという予測を、頼遠はことごとく裏切っていく。次から次へと描かれるその言動は、

先に見た伏見殿の様子を語る「静的」な語調とは対照的である。〈静〉から〈動〉へ、その時間の流れの落差が事件への緊張感を一挙に高めていく。

ところで「院」を「犬」と言った頼遠の発言について、従来は二つの語音が似ているから言ったのだと説明されてきた。しかしそれだけでは「犬」という言葉が出てくる必然性までは言えないのではないか。

頼遠は「笠懸」をした帰りに御幸と会う。「笠懸」は馬上から遠距離の的を射るもので、騎射の訓練の一つと言われている。彼がこの時現実的に「笠懸」をしていたかどうかはわからない。しかし、数々の合戦を潜り抜けてきた頼遠が騎射の訓練をしていたという記述には、十分リアリティがある。

この「笠懸」をする際には「暮目」という矢を用いる。つまり御幸に向かって「暮目負セテクレヨ」と言った頼遠の発言は、単なる言葉の上での脅迫ではなく、実際にそれを手にした頼遠が院を脅しているという状況を示している。

さらに頼遠は「暮目」でもって供奉の雲客らを「追物射」に射かけている。「追物射」は動局的を真中に取り込めて、馬上から「暮目」の矢で射るといふものである。通常は犬が的となり「犬追物」と言われている。先に述べた「笠懸」とは、的が静止しているか動いているかの違いはあるが、馬上から「暮目」で射るといふ点は共通している。また「暮目」は的が傷つかぬよう用いるものなので、この時の頼遠に殺意はなかったと思われる。おそらく彼は戯れに射

かけたと考えられる。

頼遠が「院ト云フ歟、犬ナラバ射置」と言ったのは、「笠懸」で使用する「暮目」から「犬追物」を連想し、的となる「犬」の代わりに、目の前にいる「院」を「追物射」の形式に従って射ようというわけである。

しかもこの発言には、特別の意味も含まれている。例えば『十訓抄』には、「コノウチ俊明、何事ニモ惣ジテ泣ザリケレバ、犬目ノ少将トゾイハレケルゾ」とあり、涙を零さないような人間を「犬目」という例がある。『愚管抄』¹¹では、僧も俗も「学問ト云コトフセヌ」ことを嘆き、「スベテ末代ニハ犬ノ星ヲマボルナンド云ヤウナル事ニテエ心ヘヌ也」と記し、理解できないのにできたような顔つきをすることを「犬ノ星ヲマボル」と述べている。また『古今著聞集』¹²では、三浦義村が自分より上座について下総の豪族千葉胤綱に向かつて「下総犬はふしどを知らぬぞとよ」と言い、それに対して胤綱は友を裏切ったことのある義村を皮肉って「三浦犬は友をくらふなり」と罵り返したことが記されている。『太平記』卷三十九第十章にも、「高麗王ハ我が日本之犬也ト、石ノ壁ニ書付テ帰ラセ給フ」とある。これらのことから、人に向かつて「犬」と言うのは、否定的な表現や揶揄を意味する際に使われていることがわかる。

頼遠が光厳院を「犬」と言ったのは、単に語音が似ているからというのではなく、また思いつきというわけでもない。「笠懸」で使用する「暮目」から「犬追物」の「犬」を連想し、同時に光厳院への揶揄の意を含ませた発言だと考えられるのである。

二 『太平記』における光厳院と頼遠

頼遠に「犬」といわれた光厳院は、『太平記』の中ではどのような存在として描かれてきたのだろうか。

実は、光厳院が矢を射かけられたのはこれが初めてではない。元弘三年（一一三三）、六波羅が陥落し、六波羅探題北条仲時は光厳天皇を擁して関東へと向かう。一行が逢坂山に差しかけた時、野伏たちの射た矢が光厳天皇の肘に突き刺さった。「忝モ一天ノ君、関東へ臨幸ナル処ヲ、何ナル物ナレバ、加様ニ狼藉ヲバ仕ルゾ」との言葉に対し、野伏たちは笑って「イカナル一天ノ君ニテモ渡セ給へ、御運盡テ落サセ給ハンズルヲ通シ奉セジトハ申マジ、輒ク通りタク被召思バ、御共仕リタル武士共ノ、馬物具ヲ皆捨サセテ、心安ク落サセ給へ」と述べたという（卷九第四章）。「欲心熾盛」の野伏たちにとっては、「馬物具」こそ価値のあるものであり、天皇の權威など歯牙にもかけていない。それは野伏たちだけの認識だったかというところでそうではない。

建武二年（一一三五）、後醍醐天皇に反旗を翻した足利尊氏には、後醍醐天皇に対抗するための旗印が必要であった。それが光厳院である。その院宣を入手して「一方皇統ヲ立申」したことにより、尊氏は朝敵の汚名から免れたのである。しかしこれで光厳院の權威が回復したというわけではなかった。足利幕府体制が整った後、再び位についた光厳院は「アハレ持明院殿ホド大果報ノ人コソヲハシマ

サッリケレ、軍ノ一度ヲモシ給ハデ、將軍ヨリ王位ヲ給ハラセ給ヒタリ」といわれる（巻十九第一章）。頼遠の事件があった後には「抑院ダニモ馬ヨリ下リンズルニハ、將軍ニ參合テハ土ヲ這フベキ歟」といわれたとあり、光嚴院が尊氏よりも下に位置する存在と見られていたことが窺える。また執事高師直の「若シナクシテ叶マジキ道理アラバ、木ヲ以テ作歟、金ヲ以テ鑄アシテ、生タル院國王ヲバ、何ヘモ皆流シ捨バヤ」との発言（巻二十七第六章）等も勘案すれば、人々が天皇を武家の飾りものにはすぎない存在として意識していたことがわかる。頼遠が院の御幸と知っても狼藉をやめなかったのは、このような風潮とも関連している。

一方の頼遠はどのような人物だったのか。彼は土岐家中興の祖頼貞の第七子で、早世した兄頼清に代わって土岐氏の総領として美濃国守護となった。

『太平記』では彼の武勇に焦点が当てられている。頼遠は建武二年（一三三五）の尊氏挙兵に加わり、矢矧河、箱根竹下合戦で新田義貞率いる宮方勢と戦う（古活字本巻十四第二章・第四章）。翌年には、五条大宮の合戦に勝利した頼遠が、その背後に攻め寄せて義貞を窮地に追い込んだとある（巻第十七十章）。青野原合戦においては、官軍を率いて西上する北畠顕家軍に対して、足利方の頼遠は「少トモ機ヲ不吞、前ニ可畏キ敵ナク、後ニ可退心有共見ヘザリケリ」という戦いをする。人々は「土岐美濃国ニアレバ、サリ共一支ハセンズラント憑」みにしていたという（巻十九第九章）。また暦応二年（一三三九）脇屋義助が黒丸城を落としたとの知らせを受け、

頼遠が「搦手之大将」として派遣されたこと（巻二十一第九章）や、同四年（一三四一）に義助が立てこもっていた美濃根尾城を攻め落としたこと（古活字本巻二十三第二章）¹⁷等が記されている。

このように『太平記』における頼遠は、合戦で頼りになる足利方の有力武将として描かれている。実力がものをいう時代にあつて、歴戦の武将頼遠はこの世の春を謳歌していたのであろう。事件を起こした時の彼は、「元來醉狂者也ケル上、此比特二世ヲ世トモセザリケレ」という様子であつたという。

『太平記』はこの事件を通して、頼遠に見られるような武家の奢りと、地に落ちた天皇の権威とを見つめているのである。¹⁸

二 後日譚

頼遠の無法な振舞いについて『太平記』は、

聖主上皇之御幸ニ忝クモ參リ会テ、何ナル禽獸也共係ル狼藉ヲ致ス者ヤ可有、異国ニモ未カ、ル類ヲ不聞、猿テ木朝ニハ曾テ耳ニモ触レヌ不思議也、

と述べ、彼をすぐさま糾弾しようとはしない。

事件後、本国美濃に逃げ帰っていた頼遠は、密かに夢窓国師の元を訪れて「可然者命計ヲ扶テ給リ候ヘ」と嘆願。これを受けて夢窓は頼遠助命を「口入」する。しかしその甲斐なく、頼遠は斬首、弟周濟房だけが「其時之人数ニテハ無リケル」として処罰を免れた。その後「噉ク者」がしたのか、夢窓開山の天龍寺の脇壁に、

イシカリシトキハ夢窓ニクラワレテスサイ計ゾサラニ胎コレル
という狂歌が掲げられたという。歌には、頼遠からの「口入」料が
夢窓の手に渡ったものの、肝心の「土岐」を助けられず「周濟」が
助かったという意が含まれている。『太平記』は「天下之大知識」
たる夢窓の愚かな介入を、このような狂歌の形を借りた落書で以っ
て容赦なく嘲笑するのである。¹⁹⁾

さらに後日譚として、ある雲客と武士とが「北野縁日」で鉢合わ
せをした出来事を記す。雲客は「破レタル簾」に「轅ハゲタルモノ
シ車ヲ、打トモ行カヌ疲牛ニ懸」けて乗っている。武士の方は「太
ク遅シキ馬」に乗り、流行の「田楽節、所々打揚」げる。身には
「段子金襴之小袖、色々ニ脱係」け、それを「下人之額」にも巻か
せ、小者・中間には「金銀ヲ打ク、ミタル白太刀」を持たせていた
という。雲客と武士の名前や素性等は明らかにはされていない。他
の場面においても「太平記」には、困窮の公家と武家の富貴とが対
照的に描かれていることからみて、ここに登場する二人もその典型
的な公家と武家との姿と考えられる。

両者は頼遠の事件があつた後なので、互いに相手を意識する。武
士は雲客の乗る牛車を見て「スハヤ是コソ件之院ト云ヲソロシキ物
ヨ」と言つて下馬し、頭を地につけて畏まる。一方の雲客も、相手
が武士というだけで「穴浅猿ヤ、是ハ若土岐ガ一族ニテヤアルラン
院ヲダニモ射奉ル物ニ合テ、下リザラムハヨカルマジキ」と車から
飛び降りる。もともと「立烏帽子引ユガメテ着タル」上、牛も外さ
ぬ車から慌てふために下りたため、前進し続ける車の轅に烏帽子

があたり、髻を露にするといった恥ずべき姿となるものの、猶も礼
を尽くそうとする。当の本人たちは必死だが、「往来之貴賤」たち
は「路頭之礼ハ弘安之格式ニ定ラレタル次第アリ、其二モ雲客武士
ニ会ハ、自車下テ髻ヲ可放トハ定メラレヌ物フ」と言つて笑つたと
いう。

このような武士と雲客との滑稽譚を描かなくても、頼遠の狼藉事
件を語ることはできたはずである。それにも関わらず、この話を
『太平記』がわざわざ付したことに意味がある。

後日譚に見られる武士と雲客との鉢合わせという設定、そして路
頭の礼に反した姿というのは、明らかに頼遠狼藉事件を意識したも
のとなつている。つまり『太平記』は、事件とよく似た出来事を無
名の人物に置き換えることで、頼遠だけでなく誰もが礼や秩序を
失つてしまった現実を浮き彫りにしていく。同時に、それが「往来
之貴賤」たちに笑われるという第三者の視点を取り入れることで、
無秩序な社会情勢そのものを客観的に捉え直して笑い飛ばそうとす
るのである。『太平記』は、頼遠という個人だけではなく、彼のよ
うな人間が跋扈する世の中全体へと視野を広げていく。さらにそれ
らを、「北野縁日」という多くの人が集まる場所に引きずり出した
上で嘲笑しようという辛辣さをも見せるのである。

四 諸本の違い——直義の政道をめぐって——

夢窓国帥の取りなしにも関わらず、頼遠を斬首したのは足利直

義であった。直義にとつて、頼遠は足利方の重要な戦力であり、彼を失うことは大きな痛手であつたに違いない。それにも関わらず、直義が斬首という厳しい処断を下したのは何故か。

前話の巻二十三第五章「上皇御願文事」には、光厳院と直義との關係を示す次のような話が記されている。頼遠の事件が起こる七ヶ月前の二月五日、直義は重病に陥つた。人々は悲しみ、「若此人何ニモ成給ハ、只小松大臣重盛之早世シテ、平家之運命忽ニ盡タリシニ似タルベシト思ハヌ物」はなかつた。そんな中、光厳院が直義の病氣平癒を祈願する御願書を石清水八幡宮に納めた。すると「誠ニ君臣合体之寔ヲ感じテ、靈神擁護之助ヲ加ヘ給ケルニヤ」、直義の病は忽ち癒えたという。光厳院と直義との密な關係がここから窺える。これらを踏まえて今回の直義の処置を振り返ってみると、武功のある有力武将よりも院との關係を優先させようとする姿が見えてくる。

この直義の処断について、諸本の捉え方は微妙に異なっている。前章において、『太平記』が頼遠の言動をすぐさま糾弾することはないと述べたが、古活字本では頼遠の振舞いのすぐ後に「浅猿シト云モ疎カ也」と述べ、光厳院の嘆きを記している。²¹「異朝ニモ未比類ヲ不聞。増テ本朝ニ於テハ曾テ耳目ニモ不触不思議也」との一文は、事件を知つた直義の発言とされている。また夢窓の口添えにも関わらず頼遠を処断した直義については、「天地日月未変異ハ無リケリトテ、皆人恐怖シテ、直義ノ政道ヲ感ジケル」と記されている。つまり第五章で語られた光厳院と直義との親密な關係を視野に

入れて、両者の關係に水をさす頼遠の行為を直ちに批判し、光厳院の嘆きに答える直義を誉めたのである。古活字本は頼遠狼藉事件を通して、光厳院・直義という君臣のあり方にも目を配っている。しかしそうした視点を絡ませたことよつて失つたものもある。「浅猿シト云モ疎カ也」と先にある一定の評価を下してしまつたことで、後で述べられる雲客と武士との話が付け足しのような形になつてしまつたことは否めない。古活字本は多くを語り過ぎたが故に、後日譚が持つ辛辣さを半減させてしまつたと言えよう。

一方、西源院本では、直義の政道について何ら評価を下さないし、直接頼遠を非難することもない。事件そのものを茶化してしまうような寸劇に仕立てて、そこで多くの人に嘲笑されるといふ形での批判を見せる。つまり、すぐには非難しないことで、却つて後日譚での笑いがより辛辣な意味合いをもつてくるのである。

終わりに

本話の魅力の一つは、頼遠のその破天荒は言動にあるだろう。『太平記』では、伏見殿での追善と頼遠の狼藉事件との間で、時間の流れに緩急をつけることよつて、事件の描写を緊張感に満ちたものとしている。また「院」を「犬」といつた頼遠の発言に見られるように、言葉を繋ぐ糸を巧みに張り巡らせることで、頼遠の言動を躍動的に描いていく。さらに『太平記』は、より広く客観的な立場に立つて、事件を取り巻く社会全体の空氣をも描き出している。

時には事件に密着し、また時にはそれらを突き放すといった伸縮自在の視点を持つことで、『太平記』は世の動きを見据えていこうとしているのである。その目で捉えたものを本話では、落書や後日譚による（へ笑い）という方法で批判する。たとえ対象が権力者や実力者であっても皮肉に容赦なく笑う、その痛快さが本話のもう一つの魅力と言えるであろう。

本話には他にも大変興味深い点がある。それは後日譚での笑いが「北野縁日」で起きたということである。縁日は毎月二十五日に行われており、そこには種々雑多な人間が集まっていたと思われる。「北野」が、何故笑いの場として設定されたのか、またそれが『太平記』における「北野」とどのように関連していくのであろうか。これらの問題点については今後の課題としたい。

注

- (1) 『中院一品記』十一月二十九日条。事件当日の記事はない。『中院一品記』は中院通冬が記した建武三年～貞和五年までの日次記である。引用は大日本史料第六編七による。
- (2) 『中院一品記』八月二十七日条に「今日、伏見院御八講初日也」とある。御月忌の初出記事は『花園天皇宸記』元応元年（一一一九）九月三日「今日舊院御忌日也」と思われる。
- (3) 『中院一品記』八月二十七日条では「今日参任公卿、竹林院大納言公重、予、春宮権大夫実夏、新中納言実繼、二条宰相兼」とあるが、九月三日条には「伏見院御八講結願也、此間

予雖被責伏不参仕」と見える。

- (4) 『太平記』本文の引用は、特に注記のない限り西源院本（刀江書院）による。よみ仮名等は省略した。引用文中の傍線はすべて引用者による。

- (5) 大森北義氏『太平記』の構想と方法（明治書院。昭63・3・30）二六二頁。

- (6) 「伏見殿」は橘俊綱の伏見山荘がその前身で、後に持明院統の仙洞となる。『中右記』寛治七年（一〇九三）十二月二十四日条（史料大成）に「今日辰刻許、修理大夫俊綱朝臣臥見亭已焼亡、件処風流勝地、水石幽奇也、悉為煨燼、誠惜哉」とあるのをはじめ、『擁州府志（続々群書類従第八）』に「橘俊綱山荘在伏見城山之南豊後橋辺」其地向南山水在二目前且其地形自有高低雪朝特添奇観」と見える。

- (7) 例えば「一村薄」光陰不待人「無常迅速」といった言葉が挙げられる。

- (8) 新潮日本古典集成（新潮社）『太平記』四四十頁頭注。
- (9) 日本古典文学大系（岩波書店）『太平記』二四〇三頁頭注

50には「院と犬との語音が似るのでいった」とある。新編日本古典文学全集（小学館）『太平記』三一一四九頁頭注10では「院」と「犬」の語音が似ることを利用した洒落」と述べている。

- (10) 『十訓抄』卷十一64。引用は古典文庫による。
- (11) 『愚管抄』卷第七。引用は新訂増補国史大系による。

(12) 『古今著聞集』卷十五505。引用は日本古典文学大系(岩波書店)による。

(13) 『太平記』卷十五第九章には「今度ノ京都ノ合戦ニ、御方每度打負ヌル事全ク戦ノ咎ニ非ズ、情事ノ心ヲ案ズルニ、只尊氏徒ニ朝敵タル故也、サレバイカニモシテ、持明院殿院宣ヲ申賜」と尊氏が言ったことが記されている。

(14) 『太平記』は過去の朝敵の名を列挙した後、「今其先非ヲ悔テ、一方皇統ヲ立申シ、征伐ヲ院宣ニ任セラレシカバ、威勢上三理リ、大功下ニ成リナントス」と記している(卷十六第四章)。

(15) 日本古典文学大系(岩波書店)による。西源院本には「土岐道源」とだけあって、頼遠の名はない。

(16) 『難太平記』(群書類従)に「青野原の軍は土岐頼遠一人高名と聞し也」とみえる。

(17) 日本古典文学大系(岩波書店)による。西源院本は、この時の記事を欠く。

(18) 大森氏は「佐々木道誉の乱暴へ土岐頼遠の無法へ高師直の横暴」など、個々に独立した事件の記事と記録と叙述は、第三部世界に固有な「時勢」を表現するところの象徴的な出来事であり、そうした位置付けでこれらの記事をみることができると思ふのである」と論じている(注5著書。260頁)

(19) 落書に関しては永積安明氏「落書の世界」京童の口ずさみ——『太平記の世界 変革の時代を読む』(日本放送出版協会。

昭和62・12・20)、山下宏明氏「太平記と落書」(新潮日本古典集成『太平記 二』解説)、中西達治氏「太平記と落書——構想論・作者論の立場から」(『太平記の論』(おうふう。平成9・10・25)等を参照。

(20) 例えば『太平記』卷三十三第三章に「蓮府槐門之貴族、鏗上達部、上臈女房達ニ至マデ或ハ遠国ニ落下テ、田夫野人之賤ニ身ヲ寄、或ハ片田舎ニ立忍テ、桑ノ門竹ノ扉ニ栖佗給ヘバ、夜ノ衣薄シテ暁ノ霜冷ク、朝ゲノ煙絶テ後、首陽ニ死スル人多シ」とあり、次章では「武家之族ハ富貴日來二百倍セリ、身ニハ錦繡ヲ纏ヒ、食ニハ八珍ヲ成ス」と、対照的に描かれている。

(21) 日本古典文学大系(岩波書店)による。天正本・梵舜本も同様である。それ以外の諸本は西源院本のような形になっている。

(22) 『北野誌』(北野神社社務所編纂。明治42・12・30)参照。

(付記) 小稿は第八回神戸大学文学部国語国文学会研究発表会(平成九年八月)における口頭発表に一部修正を加え、成稿したものである。席上、御教示いただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

(神戸大学大学院博士課程)